

水と災害

Q.断水や渇水の経験をしたことがあるか？（2択）

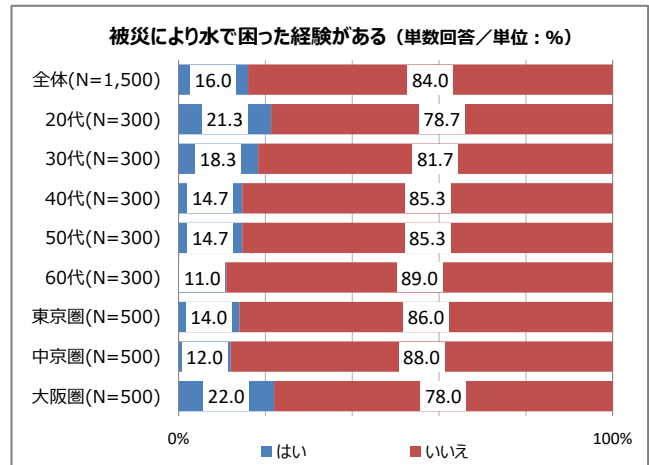
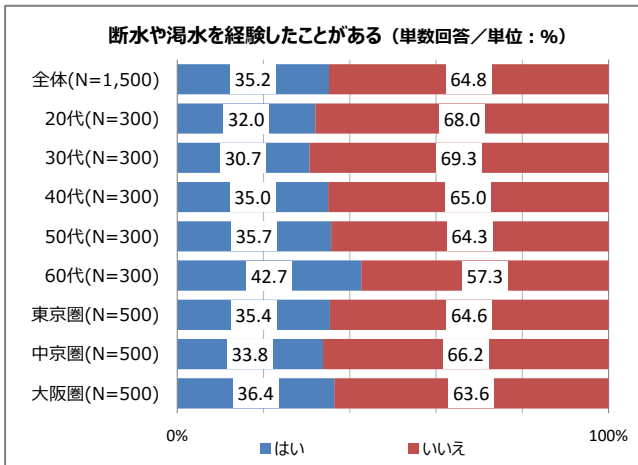
Q.被災により水で困った経験があるか？（2択）

◇3人に1人以上が断水・渇水の経験あり。60代は4割超

◇被災で水に困った経験がある人は、20代と大阪圏に多い

生活者の水にまつわる体験や経験を探る一環で、断水や渇水の経験や、被災により水で困った経験についてたずねたところ、「断水や渇水を経験したことがある」では35.2%、「被災により水で困った経験がある」では16.0%が「はい」と回答しました。

これらを年代別にみると、断水や渇水の経験がある人は、60代が42.7%で他の年代より7～12ポイント程度高かったのに対し、被災により水で困った経験がある人は、20代が21.3%で最も高く、断水や渇水の経験で数値が高かった60代は最も低い11.0%でした。また、居住地別では、断水や渇水の経験がある人は東京圏35.4%、中京圏33.8%、大阪圏36.4%と、大きな差異は見られませんでした。被災により水で困った経験がある人は大阪圏（22.0%）が東京圏（14.0%）と中京圏（12.0%）を大きく上回りました。

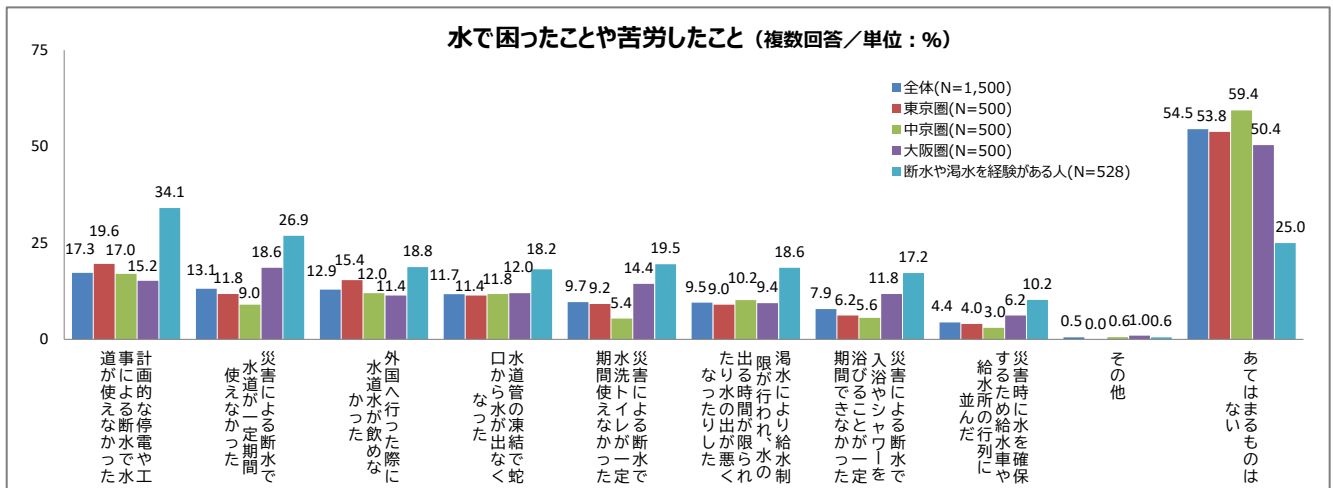


Q.水で困ったことや苦労したことは？（8択+その他+あてはまるものはない）

◇災害による断水に関する項目で、大阪圏の数値の高さ目立つ

断水・渇水経験者は、災害・非災害を問わず数値が高い

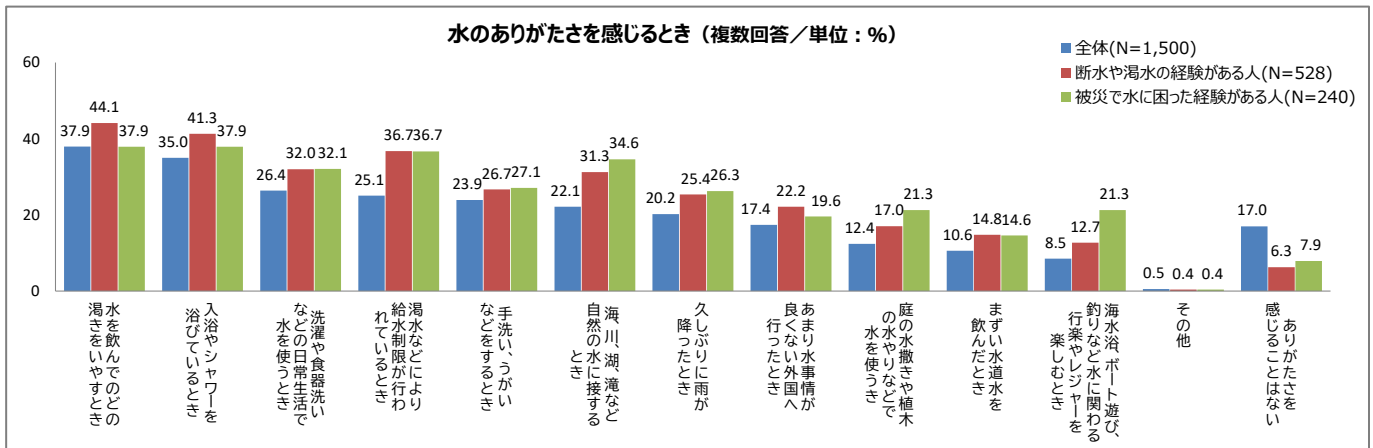
前述の断水や渇水の経験や、被災により水で困った経験の具体性を高めるべく、いくつかの事例を選択肢にあげ、実際にどのようなことで困り、苦労したかを聞いたところ、「あてはまるものはない」を除いて最も多かったのは「計画的な停電や工事による断水で水道が使えなかった」（17.3%）、2位「災害による断水で水道が一定期間使えなかった」（13.1%）、3位「外国で水道水が飲めなかった」（12.9%）となりました。居住地別では、大阪圏において「災害による断水で水道が一定期間使えなかった」（18.6%）、「災害による断水で水洗トイレが一定期間使えなかった」（14.4%）、「災害による断水で入浴やシャワーを浴びることが一定期間できなかった」（11.8%）といった、災害による断水項目での数値の高さが目立ちました。また、断水や渇水の経験がある人は、「計画的な停電や工事による断水で水道が使えなかった」（34.1%）、「災害による断水で水道が一定期間使えなかった」（26.9%）など、災害・非災害を問わず各項目で全体の数値を大きく上回りました。



Q.水のありがたさを感じる時は？（11択+その他+感じることはない）

◇水で困った経験が、水への感謝につながる？

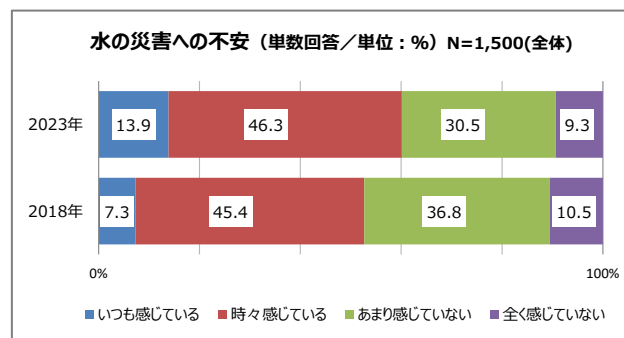
水のありがたさを感じるのはどのようなときかをたずねたところ、上位5項目は、1位「水を飲んでのどの渴きをいやすとき」（37.9%）、2位「入浴やシャワーを浴びているとき」（35.0%）、3位「洗濯や食器洗いなどの日常生活で水を使うとき」（26.4%）、4位「喝水などにより給水制限が行われているとき」（25.1%）、5位「手洗い、うがいをするとき」（23.9%）となりました。なお、①断水や喝水の経験がある人と②被災により水で困った経験がある人に着目すると、「喝水などにより給水制限が行われているとき」（①36.7%、②36.7%）や「海、川、湖、滝など自然の水に接するとき」（①31.3%、②34.6%）で全体を大きく上回ったのをはじめ、総じて数値が高い傾向にありました。この結果から、水で困った経験が、水を使い、ふれあうことへの感謝につながっていることがうかがえます。



Q.水の災害への不安は？（4択）

◇“不安を感じている人”が6割超

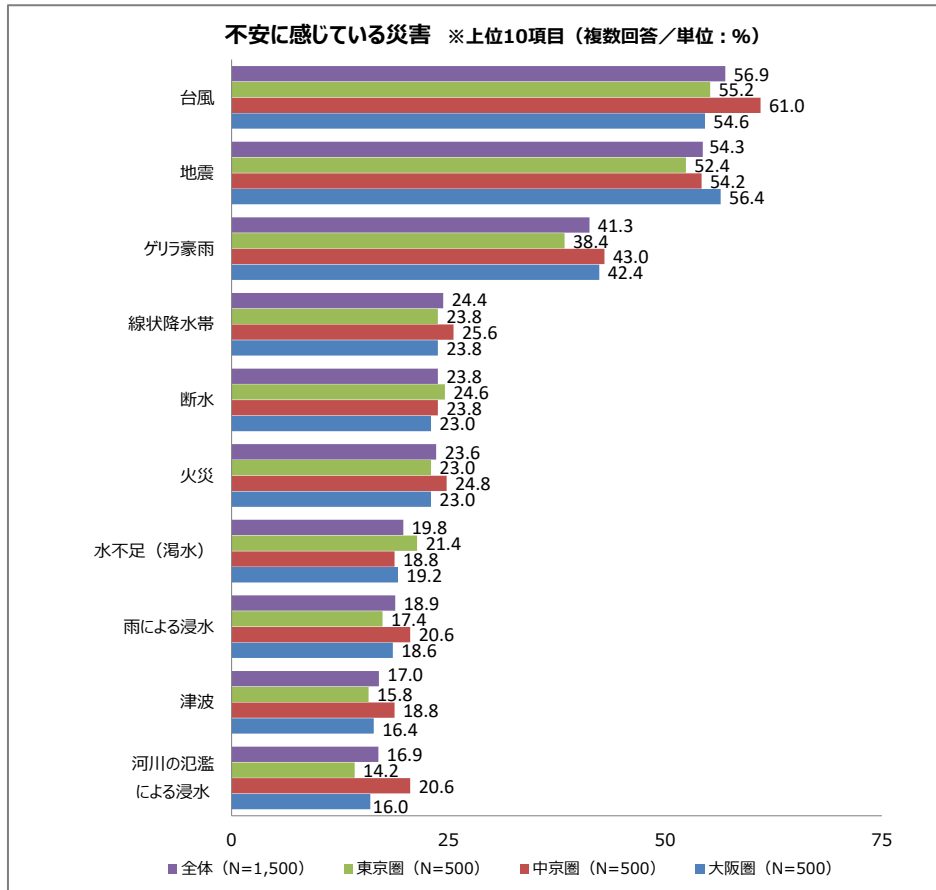
水の災害が起こることへの不安について聞いたところ、「いつも感じている」13.9%、「時々感じている」46.3%、「あまり感じていない」30.5%、「全く感じていない」9.3%で、「いつも感じている」と「時々感じている」を合わせた“不安を感じている人”が6割超（60.2%）となりました。5年前（2018年）の調査では、“不安を感じている人”（52.7%）と“不安を感じていない人”（「あまり感じていない」+「全く感じていない」で47.3%）が5割前後で拮抗していましたが、今年の調査では6：4に変化しました。



Q.不安に感じている災害は？（24択+その他+特に不安を感じたことはない）

◇「線状降水帯」が急上昇

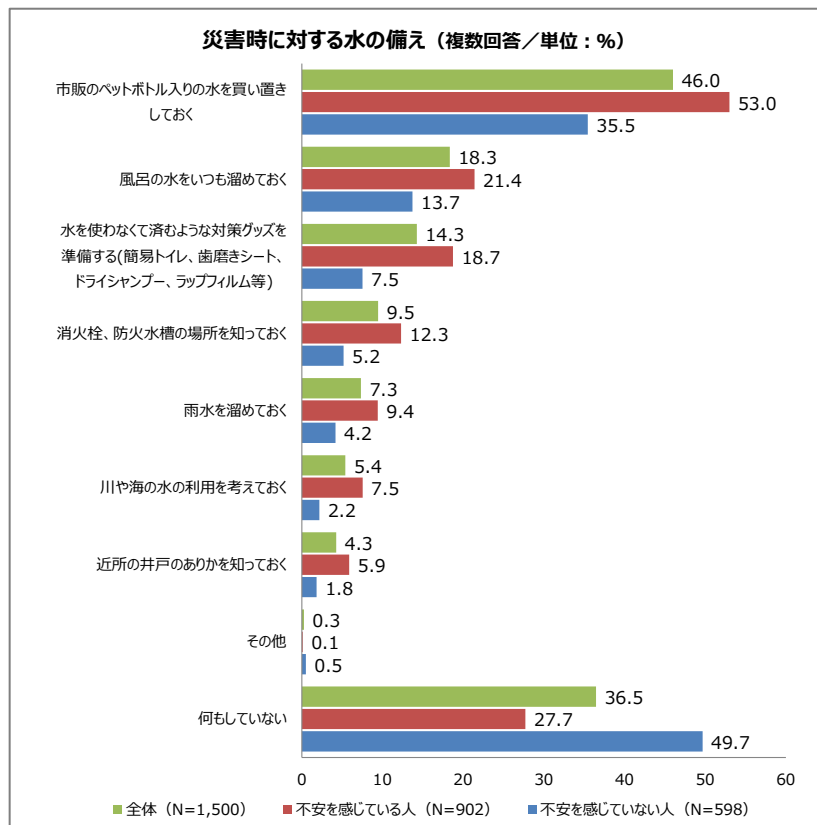
不安に感じている災害は、1位「台風」（56.9%）、2位「地震」（54.3%）、3位「ゲリラ豪雨」（41.3%）と、トップ3は前回調査した2021年と同様でしたが、「線状降水帯」が前回比7.1ポイント増の24.4%で12位から4位に急上昇。「線状降水帯」は、居住地別にみても東京圏23.8%（前回比7.6ポイント増）、中京圏25.6%（同8.2ポイント増）、大阪圏23.8%（同5.4ポイント増）と、各エリアで増加しました。この結果については、昨年から気象庁が気象情報で「線状降水帯」のキーワードを使った「線状降水帯による大雨の半日程度前からの呼びかけ」を発表していることにより、メディアの報道量が増えたことも影響しているものと推察されます。



Q.災害時に対する水の備えは？（7択＋その他＋何もしていない）

◇水の災害への“不安を感じている人”と“不安を感じていない人”に明確な差

災害時に対する水の備えは、全体では「市販のペットボトル入りの水を買置きしておく」（46.0％）が最も多く、次いで多かったのが「何もしていない」（36.5％）でした。これを水の災害が起こることへの不安の有無別にみると、「市販のペットボトル入りの水を買置きしておく」は、“不安を感じている人”が53.0％だったのに対し、“不安を感じていない人”が35.5％、「何もしていない」は、前者の27.7％に対し、後者が49.7％となるなど、両者の取り組みに明確な違いが見られました。



【災害】

「関心があるもの」という問いに対し、あてはまるものがある方の中では「水による災害」が18.8%で30項目中7位であった。水に限らず不安な災害全般についての複数回答(8～9頁参照)に対して、2015年には地震(59.3%)が僅差で台風(58.3%)を抑えていたところ、関西国際空港が浸水した2018年台風21号の大被害などを受けて2019年からは逆転し、今年も台風(56.9%)が地震(54.3%)を上回っていて、ゲリラ豪雨(41.3%)が3位で続く。

線状降水帯(24.4%)が2021年(17.3%、12位)から大幅に順位をあげて4位につけたのは、2022年6月から線状降水帯の発生の可能性を気象庁が半日前に予報するようになり、一般に耳にする機会がさらに増えたおかげだろう。以前は発生していなかった線状降水帯が気候変動によって生じるようになったというわけではなく、気象レーダーによる観測網が日本全体を覆い、高い時間・空間解像度で降水分布の挙動を目の当たりにできるようになった。そして、発達した積乱雲が時として地形と相互作用しつつ次の積乱雲を生じさせて同じ場所に激しい雨が数時間降り続くことになるといったメカニズムの理解が進んだため、洪水や土砂災害につながる可能性が高い現象として危機管理のために耳新しい名前が巷間に普及させようとした結果、これまでのところ思惑通りに進んでいる、ということだろうか。

ゲリラ豪雨は専門用語ではないが、いわゆる集中豪雨の中でも予測が困難なものを「ゲリラ」豪雨と呼ぶことが多い。そのため、リスク認知的には恐ろしいと感じやすいゲリラ豪雨であるが、線状降水帯の方がそれなりに広い地域を豪雨が覆い、時間的にも長く続いたため、いずれはゲリラ豪雨を上回るくらいにまで線状降水帯への関心が高まって欲しいものである。

